
とある進化の実現咆哮（シュミレートプレス）

新月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある進化の実現咆哮シュミレートプレス

【Nコード】

N9825X

【作者名】

新月

【あらすじ】

彼は死に直面した。いや、直面しそうになっていたという方が正しいかもしれない。彼、銀恭矢シロギキウヤが目覚めた力は実現咆哮シュミレートプレス。自分の咆哮けびを皮切りに、その咆哮の内容を演算なしの無条件で行なうことができる。いわば、『言ったことを実現させることができる力』である。咆哮と魔術が交差するとき、物語は開始へと向かう

E p i s o d e 0 能力覚醒（はじまり）（前書き）

どうも。とある魔術の禁書目録にハマリ、前から書きたかったこのお話に手を出した新月というものです。

以後、お見知りおきを。

Episode 能力覚醒（はじまり）

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ 嫌だ、死にたくないっ
！」

自分の死が目前に迫るその瞬間、人は、とんでもない力を発揮する
という。

「お前はここで死ぬんだ。安心しろ、一瞬であの世行きだ」

そこに、修羅場を迎える高校生が一人。

「なんで、なんでこんなことに……！！」

彼は、ただ目撃しただけだった。その、現場を。

「ここを通ったのが運のツキだ。アレを見られたからには……
・死んでもらうしかない」

男は高校生に右手を向けた。そこには、常軌を逸する威圧的な
にかがあつた。

「……ここに、《学園都市》に来て、ただ、普通に生活し
ていただけなのに……」

何故殺されなくちゃいけない？ 高校生は、誰がこの状況になる
うと思う一つの疑問を問うた。だが当然辺りに男以外の人影は見え
ない。ここには彼と、その男の独自空間と化していた。

「……………死にたくない……………」

男の右手が赤く灯る。恐らく発火能力バイロキネシスなどの能力を有しているようで、周りの温度が上昇していくのがわかった。それに反比例して高校生の体温は下がっていく。

「お前はどうかやら無能力者のようだが……………ここで死ね！」

放たれた赤い弾。恐らく超高温で、それに触れた瞬間が自分の人生の終わりを指している。高校生は思った。自分にも能力があれば、こんなことにはならなかったのではなかったのだろうか？

しかし、そんなことを考える暇もなく弾は近づいてくる。今時分にできることなんてない。なら

「お前なんて消えればいいんだ！！」

高校生は叫んだ。最後の悪あがき。相手を呪うように、ただ、大声で、憎しみを込めて、叫んだ。高校生は目を閉じた。これが、自分の短い人生の終わりであるかのように。

だが、高校生の考えた通りに物事は進まなかった。

神は、その声を聞き入れたのだ。

「な………!」

弾を放った男は驚いたような声を出した。いつまでも弾がこないことを不審に思った高校生は目を開けた。

その咆哮さけびには、相手はおろか彼すら知らない力が宿っていた。

自分が言ったとおり、消え去ったのだ。自分の命を奪い去ろうとしたその赤い弾が。

「な、なんだと!? お前も能力者だったのか!？」

男は狼狽した。今、目の前に対峙している相手はなんの能力も持たないただの無能力者だと思っていたからだ。

だが、この目で見た。高校生が咆えた瞬間、自分の一撃が消し去られたことを。男はなにか異物でも見るような目を高校生に向けた。

「なんだ………これ………?」

自分でも身に覚えのない能力が宿っていた。万年レベル0だと思われていた彼には、たった今、能力が覚醒したのだ。

発火能力パイロキネシスを打ち消す力………? そんな能力なのだろうか。いや、違う。相手の能力が消えたときは何の前触れもなかった。いや、あるとしたら先ほどの叫びぐらいだろうか。

「………待てよ?」

違和感に気付く。

そう、叫んだのだ。消えてくれ、と。

だが高校生が消えてくれと言ったのはその相手に対してだ。別に相手の能力そのものに言ったわけではない。消えてくれというのは咄嗟に言った言葉のあやみたくないものだ。

「まさか………」

まさかとは思う。だが、先ほどのものを見る限り（目を瞑っていたが）その仮説は正しいものになっているのかもしれない。高校生は立ち上がり、その男に近づいていった。

「や、やめろ！ 来るなあ！」

男は先ほどの威勢の良さは全く見られず、恐怖に顔を染めている。自分の力が敵わない相手が現れたのだ。しかもそれがどんな能力かもわからない相手。怖がるのも無理はない。

試せば、どうなるのだろうか。自分が手に入れた、新たな能力を

「やめろ………やめてくれ！」

完全なる立場の逆転。今度は自分が相手に恐怖を与える番だと思つと、なぜか笑いが止まらなかった。

「………燃え尽きる!!!」

高校生は、自らの力の矛先。つまり、咆哮を相手にぶつけた。その瞬間、男の服からは爆炎が立ち込めた。

「うわああああっ!!!!!!」

男は燃え上がる身体をどうすることもできない。高校生はただその光景を見つめるだけであった。

「・・・・・・・・・・はは。ははは・・・・・・・・・・」

高校生は自分ですら、自分の能力を把握仕切れていなかった。でも、わかったことが一つだけある。

・・・・・・・・・・
自分は、他の何者とも違った能力（力）を手に入れたことに・・・・・・・・

E p i s o d e 0 能力覚醒（はじまり）（後書き）

感想・評価・意見などがありましたらどうぞ気軽に言ってください。

Episode 1 遭遇(であい) (前書き)

どうも、新月です。

いきなり感想を書いてくださった方がいたのでとても嬉しかったです。

今回はタイトルどおり、遭遇です。

お楽しみください。

Episode 1 遭遇(であい)

「……………なんでだろ」

高校生は道を歩く。

高校生は先ほど自分の身に起こった不可解な現象に頭を悩ませていた。

「さっきの爆炎も気の毒そうだから消しちゃったし……………」

先ほどの男は今、あまりの恐怖で気絶している。消える、と言ったら男を包んでいた炎が一瞬にして消え去った。これは発火能力なのだろうか？

いや、それは多分ありえない。学校の時間割りで行なった能力の適性にも、俺こと銀恭矢は全部最悪の数値を出していたはずだ。

ちなみに俺の名前は銀恭矢。第7学区にある高校に在学している。この彼が通っている学校は学園都市の中でも低脳な者、つまり無能力者や低能力者などの吹き溜まりが多く在籍している。

彼も、その無能力者の一人だった。

だったと言うからには今は立派な能力者だ。しかし自分自身ですらその能力を把握できていないが。

「自分ですら把握できない力って恐ろしいな……………」

恭矢は自らの力に驚き、感動を覚え、そして 恐怖を感じた。自分の仮説が正しいなら、それは最強を意味するんじゃないだろうか。どんなヤツにも怯えなくて済むのだろうか。自分の力を誇示して、最強と名乗っても良いのだろうか。

そんな考えを巡らせた恭矢は、自分の力を試そうと考えた。

「この空き缶で良いかな」

落ちているには割りと珍しい空き缶が目の前にあった。

基本的にゴミがあれば清掃ロボが持つていつてしまうからだ。

「……………なんて言えはいんだろう」

恭矢はふと考えた。あまり危ないことをするのはよそうと。風紀ジャック委員や警備員アンチスキルに目をつけられたら今後の生活に支障が出るからだ。あくまでも、普通では絶対に起こりえないことをしてみよう。そう考えた。

「……………破裂しろ!!」

叫んだ。その瞬間、空き缶は一瞬の間を置いてから爆音を発し、まるで細断機にでもかけたかのような形になって目の前に散っていた。

「まだだ。まだこの程度じゃ確証は取れない」

自分の能力に確信を持たせる為、また普通ではありえないことを試すことにした。

恭矢は次に、自分の視界の右側にある木に注目した。

「……………向こうに移動しろ!!」

その瞬間、木は消え、自分の思い描いたとおりの場所に移動していた。

この力はなんだ？ テレキネシス 念動能力？ テレポート 空間移動？

だけどこれでは多重能力デュアルスキルになってしまふ。多重能力は事実上ないものとされているし、あつたとしても脳がその現象の演算を複数行なえるとはとても思えない。

その後も色々なものを試した。

目の前の壁を破壊したり、竜巻を起こしたり、それを消したり、もう一度起こしたりとそれは様々なものを行なった。

しかもその全てが、自分の言っただとおりになったのだ。

「……………あと、一度だけ試してみよう。これでラストだ」

恭矢は最後に、雲ひとつない空を見上げ、叫んだ。

「……………雨よ、降れ！」

流星にこれは自然現象だ。超能力者でも力を応用しない限り、雨など降らせることはできないだろう。

だが、

「冷たっ！」

雨粒が、恭矢の顔に振ってきた。そこから少しして少々小降りの雨が降ってきたのだ。

彼は言ったただけだ。ただ、言ったただけだ。
．．．．．これで確信が持てた。自分が持っている能力の、本
当の力。

「やっぱり、俺の力は．．．．．言ったことを実現させる力」
．．．．．！」

正直、信じられない。今まで自分にそういう力がなかったからだ
ろうか。

どういう原理なんだろう．．．．．？ そういうことも考えた
が今は覚醒したばかりのこの能力を使って優越感に浸りたい。

何も考えずに、ただ、使ってみたい。

「あ．．．．．？」

不意に視界の隅が発光した。

近くの裏路地に光が走った。いや、正確に言うくと電流だ。それも
結構な圧の電流。何かが起こっている。そう感じた。

自分の意志とは無関係に足が動く。いや、もしかしたら自分の意
志だったのかもしれない。

そこにいるのは、普通の人間たちではないことに恭矢は気が付い
ていなかった。

路地に入ると、一人の中学生と思しき少女が不良をボッコボコにしていた。

「……いや、本当だ。シニールな光景にみえるのはそんな光景に今まで遭遇したことがないからだろう。というか、遭遇した人がいるなら話がしたいくらいだ。」

影からその様子を窺っていると、その少女は俺の存在に気が付いたようで、声を荒げて話しかけてきた。

「そこにいるヤツ！ 隠れてないで出てきなさい！」

俺のことだろう。正直、出てきたくはないが今にもあの顔で殺されそうなのでここは大人しく言うことを聞いておこう。

恭矢は物陰から身を乗り出し、その少女の前に姿を現した。

「アンタ、コイツらの仲間？ でもそんな風には見えないわね……
……なんだか見た目がモヤシみたいだし」

俺と倒れてるヤツらを交互に見比べて、初対面の相手に対してマナーの欠片もない態度を取る中学生。

なんなんだコイツは。馴れ馴れしいというか、喧嘩口調というか。年上に対する威厳もクソもないというか。

よく見ると中学生はこの街、《学園都市》ではかなり有名な常盤台中学の制服を着用していた。

「その制服、常盤台中学か」

「知ってるの？ まあ、この街で知らない人の方が少ないか」

少女は少々つまらなそうに鼻を鳴らした。なにをそこまでしたら機嫌が悪くなるんだろうか。

その光が当たった壁の一部は跡形もなく崩れ去って見るも無残な形と化していたのだ。

「こんなコインでも、音速の三倍で飛ばせばそこそこ威力が出るのよね。もつとも、空気摩擦のせいで五〇メートルも飛んだら溶けちゃうんだけど」

聞いたことがある。

超能力者で超電磁砲レベル5 レールガンを持つものがあるということ。

確か序列は第三位。そんな能力者が今、目の前にいる。

「はは………」

自然と震えた。鳥肌のようなものが一気に立ったのを感じる。

「なに、そんなに怖かったの？」

少女は言った。弱いものを見るような目で。

「いや。怖くなんてない」

「え？」

恭矢は言い返した。そして、こつ続けた。

「むしろ、一番最初にこんな良い相手と戦えると思っててもみなかったよー!!」

「………はい？ 何それ？」

これは恐怖に対する震えではない。むしろ、自分の能力を一番最初に試せる好敵手と巡り会えて武者震いを起こしていたのだ。

「アンタも能力者？ まあいいわ……一分もかけないで倒してあげる！」

少女は叫んだ。その瞬間から少女の前髪から角のように青白い火花が散った瞬間、

槍のごとく一直線に雷が襲いかかってきた。

その一撃を見れば普通の者なら気絶していてもおかしくはないだろう。だが、恭矢はそれをしっかりと見つめ、そして咆哮だ。

「自前方三十センチに絶縁物質の壁を発生！！」

その咆哮^{さけ}びとともに雷は消えた。いや、正しくは何かの壁^{かべ}にぶち当たって消えた。

「え………？」

少女は事態の把握ができていない。自分の力が消されたことに、ただ、疑問を覚えた。

「さあ、もつとこいよ？ 序列三位のビリビリさん？」

「くっ！ こんのっ………！」

少女は更に電撃の量を増やし、恭矢にぶつけてきた。だが、それも虚しく恭矢の目の前で簡単に打ち消されてしまった。

恭矢の目の前には少女には見えない絶縁体の壁が存在している。

それに少女は気付かず、電撃を延々と打ち込んでくる。これではただの力の無駄使いだ。

「どうして当たらないのよ！ ム力つく！」
「次はこんななんてどうだ……空間固定！！ 相手の周囲に標準以上の電気吸収物質を配置！！ 固定！」
「んなつ……！」

突如、少女の周りに黒い塊が出現した。その塊が現れた瞬間、少女の身体からは電気が無造作に吸い出されていった。

「本当に言つたとおりになるんだな……」
「くっ！ よくわからない能力者ね！ その化けの皮を絶対に剥がしてやる！」

相手は更に激昂した。能力の使い方がまずかつたんだろうか？
ただどここまでできたら叩き潰すのみだ。全力を出させていたどころ。相手は電撃使い。その弱点は

「食らいなさい！」
「やっべ。」

俺が咆哮さけぶ前に、相手は超電磁砲の構えを取った。確かにそれなら俺の電気吸収物質の影響をあまり受けずに攻撃することができる。相手にとつたら好都合だし、音速の三倍だから俺が避けきる前に当たる確立も高いだろう。だが

「甘いね。……自前方に鉄壁ブロックを設置！！ 硬度レベルを金ダイ剛石ダイヤモンドに設定！」

超電磁砲は電撃ではなくコインという物理現象だ。よって、壁かなにかの物質さえあれば

「んなっ……!!」

簡単に防ぐことが可能だ。

コインは目の前に出したダイヤモンドの壁に阻まれ、防がれた。

「あ、アンタ……一体どんな能力者なのよ！ 黒子より凄
い空間移動テレポート持ってるみたいだし……何者よ！」

少女は怒り狂う。しかしその間にもその少女からは電流が吸い取
られ続けている。

(そろそろ場合だろうな……)

「あっ……?」

少女から不意に力が抜ける。先ほどから行なわれていた電気吸収
の影響だろう。

電撃使いは継続的に電気を使いすぎると、全面的に能力が使えな
くなるということを聞いたことがある。それを利用させてもらった。
これではらくは動けないだろう。

「あ、アンタ……」

「悪いな。君にはここでやられてもらう。大丈夫だ、殺すなんて惨
い真似はしないから。」

最後にトドメを刺すためになにを言おうか……よし。動
けなくしよう。何かに磔のような形にしておけば死にはしないはず
だ。

「この者を、」

そこまで言った時だった。

「おい、お前！」

「？」

不意に声をかけられた。男の声。
振り返ると

「お前。なにしてんだよ……！」

そこには恭矢と同じくらいの、**整髪塗料**で髪をツンツンにした少年が立っていた。

Episode 2 勇者(ヒーロー) (前書き)

上条さん登場。さて、これからの展開をどうするか……

Episode 2 勇者（ヒーロー）

トドメを刺そうとしたときに、とんだ闖入者が現れた。

恐らく相手は恭矢と同じく高校生。しかも恭矢の学校と制服が同じ。恭矢と同じ年か、あるいはそれに近い年齢のようだ。

「……………なに？」

その問いに対して、少年はこう言ってきた。

「なにしてんだよ、お前」

「なにつて、見りゃわかるだろ。実験だよ実験。自分の力を試していたのさ」

そう。恭矢にとってはただの実験だ。相手が強ければ強いほど、自分の力はこれほどまでに使えるのかとの証明になる。ただ、それだけのこと。別に殺すつもりなどはサラサラない。

だがこの少年はなにが気に食わないのか、恭矢に向かって声を荒げて話しかけてきた。

「それが実験？ ふざけんじゃねえよ！ 中学生の女の子立てなくなるまでにして、何が楽しいんだ！」

どうやらこの少年は恭矢がこの少女に対してなにか攻撃をしてここまで弱らせたと考えたのだろう。とんだ誤解だ。ただ単に電気を吸収して疲弊させただけなのに。

「アンタ……………どこのどいつか知らないけどさ……………邪魔……………しないでよ。見ての通り、喧嘩中なんだから……………」

・・・」

少女は少年に対して冷たく言い放った。プライドが高いのだろう。他の人の力は借りたくない、とでも言ってるようだった。だが俺の能力を食らって既に立つことすらままならないようだ。その言葉にはもう力は宿っていない。

「これが喧嘩？ ふざけんな！ 一方的にやられてるこの状況で意地張ってんじゃねえよ！」

少年は、一言で言うなら熱い男だ。もしかしたら自分の身も危なくなるこの状況で、わざわざこんな路地まで来て、見ず知らずの少女を助けに来るなんて。

「・・・物凄く殺してやりたい。なんで、俺のときはこんな勇者みたいなやつが来なかったんだ・・・」

「ここは、俺がやる。お前は逃げてろ」
「・・・」

少女も少年に諭され、渋々だが後ろの表通りの方にヨロヨロと歩いていった。恭矢はしばらく少年を見つめ、思ったことを素直に言った。

「お前、凄い面白いな。ピンチの少女を助けて勇者ヒーロー気取り。うん、最っ高に面白い」

「俺はちつとも面白いなんて思えねえけどな」

「そりゃそうだ。俺は能力者、お前は・・・多分能力と呼べるものはないんじゃないかな？ そんなお前ってとっても不幸だと俺は思うよ」

制服を見て、恭矢は言った。自分の通ってる高校のほとんどは無能力者か低能力者。そんな彼が超能力者の序列三位を疲弊させた自分に勝てるわけがないと考えていた。

しかし少年は恭矢の目をしっかりと見て、こう言った。

「ああ、そうだな。不幸だなついてねーよ。本当なら、俺はコンビニに立ち寄って買おうとしていた週刊誌を買って途中でトイレ行って家帰って見たい番組見て寝るはずだったのにな……。コンビニ行けば強盗に出くわすし、仲間だと思われてしばらく捕まっていたし、開放された後も買おうとしてた週刊誌が売り切れてたり、トイレが混雑してたり家帰る途中で通行止め食らって見たい番組見れなかったりで、もう本当ついてねーよ」

少年は先ほどまでに自分の身に起きた不幸について一息で語った。これだとちよつと不憫に見えてくる……。だが、手加減はしない。あのときの恭矢と同じように、力がないことを悔やめば良いんだ。ここで……。一つの肉片すら残さずに抹殺してやる。

「でもよ、今思ったわ。これから不幸になるのは俺じゃなくて

」

一瞬、何か悪寒のようなものが走った。

「お前だよ」

不敵に笑う少年。相手には、大した力はない。そう思っていた相手にこつも余裕な態度を取られた。この時どれほど恐怖が、殺意が沸いたことか

「わかったよ。こんなにムカつくヤツだと思わなかった……。・。・。・

爆発しろ！！」

恭矢は咆哮さけんだ。これで相手は塵も残さず爆発するだろう。そう思った。しかし……………

「？」

少年には何も起こらない。

「んなつ！？　なんでだ！」

確かに言った。だが、少年は何の反応もない。

このとき、恭矢は気づいていなかった。相手の右手には、イマジナリ幻想殺しと呼ばれる、『異能の力』が宿っているということに。

それはたとえ恭矢の持っている現実咆哮シュミレートプレスさえ、打ち消せるということも気付かなかった。

「くっ！　直接的な作用は実現できないのか！？」

そして、恭矢は盛大に勘違いした。しかし無理もない。彼は先ほど能力が覚醒したばかりだ。勘違いするのも仕方ないと言えるだろう。

本当なら、少年の身体を木っ端微塵にすることだって可能だ。が、相手が悪かった。その右手は神様の作った奇跡システムだろうがなんだろうが問答無用で打ち消せるものだ。その爆発が起こる前に、その声は彼の右手によって破壊されていた。

「なら……………超電磁砲を準備！」

「げっ！」

恭矢は先ほどの少女の放った超電磁砲なら仕留められるだろう。そう考えた。コインが一枚、目の前に具現化した。それを恭矢は先ほどの少女と同じ要領で上に弾き、そして打ち込んだ。

先ほどと同じようにオレンジ色に光る槍が、少年目掛けて飛んでいき、被弾した。

「これならどうだ………?」

少年に被弾した瞬間、爆風が巻き起こる。視界は最悪、だが直撃は確実にしていた。死は免れないだろう。だが、

「死ぬ！ ホントに死ぬ！ ホントに死ぬかと思った！ きゃーっ！！」

確かに超電磁砲に直撃したはずの少年の姿が、そこにはあった。恭矢は驚愕の顔を浮かべた。

「何で、お前………!」

恭矢は続けて三発ほどコインをぶつけた。しかし全て直撃してはるの少年は煙が晴れるたびにそこに立っていた。無傷で。

「お前も能力者だったのか………誤算だな」

相手の能力は未知数。しかもこちらの攻撃は全て防がれているという悪条件だ。勝てる見込みは少ないのかもしれない。

「こっちから行くぜ!」

「くっ!」

少年はこちらに向かってきた。やばい、能力でやられる！ 恭矢は咄嗟に防御壁を出した。だが、それは少年の右手に触れた途端まるでガラスのように砕け散った。そして、右手が恭矢の目の前に突き出され

「んなっ

」

恭矢の顔面を殴りつけた。恭矢は、近くにあったゴミ箱に吹っ飛ばされ、ダメージを負った。しかし恭矢は。それほどまでのダメージを食らわなかった。顔を殴ること、それだけしかしてない。あえて言い方を変えるとすると、能力を使うことなく恭矢に攻撃をしてきたのだ。

だが、恭矢はその程度の攻撃で終わるつもりはなかった。

「て、めえ……………！　なんで能力を使かわなかった！　ナメてんのか！」

恭矢は起き上がり、声を荒げて少年に言う。しかし、返ってきたのはおかしな回答だった。

「いや、使わないんじゃない。使えないんだ」
「なに……………？」

意味がわからない。能力者でないならどうやって恭矢の攻撃をかわすことができたんだ？　そう思うと、余計にこの少年に対する恐怖が沸き起こった。

「くっ！　ふざけやがって……………長剣を構築、出現！」

目の前に大きな剣が現れた。電撃などの特殊能力が効かないなら、

物理攻撃で効くと思ったのだ。恭矢は長剣を握り締め、少年に切りかかった。だが

「なにっ!？」

少年はそれを右手で迎え撃ってきた。普通なら向かってくることすら恐ろしいはずなのに、少年は自分の右手一つでこちらに向かってきた。一般ではそれを無鉄砲バカと言うはずだ。だが、少年は走りを緩めはしない。恭矢は向かってくる少年を横薙ぎに切り裂いた。しかし少年はそれを右手一つで受け止め、その瞬間、剣は粉々に砕け散った。

しかし驚いている暇も無く、少年の拳は恭矢の顔面に吸い込まれていった。流石の恭矢もこの一撃はきつかったのか殴り飛ばされた後、しばらく起き上がることはなかった。

あの少年は、本物の勇者ヒーローになったのだ。

Episode 2 勇者(ヒーロー) (後書き)

ちなみに恭矢のプロフィールはしばらくしたら投稿します。
楽しみにしておいてください。

E p i s o d e 3 銀 恭 矢 (じぶん) (前書き)

今回、一応第一章は完成です。

Episode 3 銀 恭矢(じぶん)

少年の一撃を食らった恭矢はしばらくして気を取り戻した。

「……………結構いいのもらっちゃったな」

痛む頬をさすりながら起き上がる恭矢。するとそこには先ほどの少年が立っていた。缶ジューズを二本引っさげて。

「よう」

「……………は？ 何してんのお前？」

「あ？ いや、このまま放置するのもなんだったから面倒見てた」

呆れた。

先ほどまでこの少年は恭矢と戦っていた。しかも恭矢は真剣ガチの殺し合いをしようとしていた。それなのにもかかわらず、しばらくは痛みで起き上がれなかった恭矢を介抱していたと言っただ。

「……………お前バカなのか？ さっきまでお前のごと殺ろうと考えてた男に缶ジューズなんて差し出すか普通」

そう言いつつも恭矢は少年の手にあつた缶をもらう。それを一息に飲む。飲み干した所を見ると、少年は言葉を続けた。

「いや、同じ制服着てたし、殴つたの俺だし、少しは心配してやるうかなあ〜っと思ってみたり」

「……………なんだそれ」

恭矢は思わず笑ってしまった。このバカ、もし反撃されたらどうす

るつもりだったんだよ。

「なんだよ。笑うなよ」

「いや、ゴメン。なんかこんな話してるとき、さっきまであんなことやってた自分がバカらしく思えてきてさ」

「……ははっ。確かにそうだな」

二人の間に、それほどの会話は必要なかった。ただ次の瞬間には既にお互いの名前を言い合っていた。

「俺の名前は上条^{かみじょう} 当麻^{とうま}。学校の紹介は不要だな。よろしく」

「俺の名前は銀 恭矢。こちらも学校の紹介は不要だな。こちらこそよろしく」

二人はお互いに手を取り合い、握手をした。

これだけの行為なのに、なんだがとてもむず痒く感じた。握手なんて久しぶりだからだろうか。

なんとも言われぬ感触がそこにはあった。

次の日の放課後。学校では恭矢に対する特別な身体測定システムスキャンがあつた。しかし他の生徒には秘密裏に、極秘に、情報が漏れないように細心の注意を払って行なわれた。

恭矢は言われたとおり自分の能力を披露、そしてそれを科学的根拠に基づいて計算し、算出し、数値を出した。そこに書かれていたのは、教師でも驚きの個性を持った能力だった。

別の部屋に行きその結果を知らされる恭矢。担当をしてくれたのは、学園七不思議にもなっている超低身長教師、月詠小萌先生だった。

「えっと、銀君の能力は『原子配列変換能力』ですねー」

「はい？ なんすかそれ？」

正直、恭矢は科学に対してかなり無頓着だ。自分の興味のあるものなら徹底的に調べるがそれ以外はからつきしダメ。そんな男なのだ、銀恭矢という男は。

「えーと簡単に説明するとですねー、原子は一応永久不変という特徴を持っているんですけど、それが銀君の声によってその定義自体が歪んじゃってるわけなのですー」

「???? 余計ワケがわからなくなっちゃってたりするんですけど・

.....」

原子が永久不変というのは知ってる。中学生で習うことだからだ。だけど、その定義が歪むってことがどういうことかわからなかった。

「つまりですねー、君の声は空気中の原子を別の原子や物質に変えちゃう、ってことなのですー」

「ああ、そういうこと。つまり窒素を炭素に、みたいな？」

「厳密に言つとちょっと違いますけど、大体はあってるんですー。しかもただその原子に変わるだけじゃなくて、必要な形に変形したり、分子になったり、はたまたその原子の結合の状態ですら変更が可能なんですー。例えば炭素で表現すると、シャーペンの芯からダイヤモンドの硬さにといった具合にですねー」

なるほど。それなら今までのことにはつじつまが合う。雨だって降らせようと思えば周りの物質を雨雲のように変化させたりできるし、木の瞬間移動だって木の原子そのものを一度バラして移動させて、もう一度元に戻せばできるし、ダイヤモンドの壁も空気中の酸素や窒素を炭素に変換してその結合の状態をダイヤモンドまで引き上げれば作ることができる。

つまり、無いものがあるものにすることもできるし、あるものを無いものにするだけだってできるといふことだ。

「しかも銀君の場合、変化させられるのは原子だけじゃないみたいなのです。原子だけなら別に良いのですが、現象や重力に波動、その他モロモロですら変化や流動、操作することが可能みたいなのですー」

「……本当に『言ったことを実現させる力』、なのか……
……先生。それってこの街で最強を意味するんじゃないですか？」

少し調子に乗ったような口調で恭矢は言った。自分の力に自身があるからそういうことが言えたのだろう。だが小萌先生は調子に乗った恭矢を一言で斬り捨てた。

「それはないですねー」

あまりにもハッキリと言われたものだから恭矢は一瞬思考が停止した。

「だいたい、学園都市には能力者がたくさんいるんですよ。その中に銀君との相性が悪い人の一人や二人軽くいるんじゃないですかねー？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・ 凶星かもしれない。

昨日出会った上条当麻と名乗る少年（以後これを当麻と呼ぶ）。当麻は恭矢の能力をことごとく破壊していた。あの能力が何なのか知らないが、あれに勝てるとはまず思わないだろう。

「それに、学園都市には超能力者^{レベル5}が七人もいるんですよ。しかも序列第1位の能力者は絶対的な力を誇るのです。それに比べたら銀君の能力なんて、猛毒を持っている蜂にもかかわらず羽がなくて飛べないのと一緒ですよー」

「・・・・・・・・ 序列・・・・・・・・ 第1位」

恭矢は小萌先生の言葉を復唱する。

聞いたことがある。超能力者^{レベル5}の序列第1位は他の追随を許さない絶対的な能力の持ち主だとか。

「銀君。能力を持ったからといって調子に乗っちゃダメですよ？」

「アナタの能力は完全なものじゃないんですから」

「完全ではない、という部分がやけに強調されていた。そして続けて俺の弱点について指摘した。」

「だって声に出さないと発動しない能力なんて、不意打ちとかされたら終わりですからねー。後ろを取られてザックリ！なんてことにならないように注意するんですよー？」

「ああ………確かにそうですね。注意します」

声に出さない限り恭矢の能力は発動しない。それに言ったことを実現させるには、その実現させたいことを言い切らなければその現象は実現しない。つまり、言い切る前に攻撃されたらその時点でアウトだ。

「じゃあ、能力や機能のことはしっかりと上層部機関^{うえ}に報告しておきますからその後の実験や研究費用などはしっかりとらってくださいねー？」

「へーい」

小萌先生の言葉を軽く流しながら部屋を出る恭矢。これで今日の日程は終了。後は家に帰るだけなのだ………

「まだいるかな………？」

恭矢は当麻を探した。アイツは同じ学校だし、探せば見つかることも難しくはないだろう。

そうして探すこと数分、当麻は意外に早く見つかった。自分のクラス隣の隣、つまり小萌先生が担任をしているクラスに当麻はいた。

近くには青髪にピアス姿の長身とアロハシャツ姿のグラサン男が立

っていた。

「ん？ カミヤん、誰かこつち見とるで？」

「ホントだにやー、カミヤん。一体どこであんな美男子見つけたんだにやー？」

「ま、まさかカミヤん……男食家なんか！？」

「俺はそんな特殊な趣味を持った覚えはねえ！！ 友達だ友達！」

なにやらこちらを見て物凄い誤解をしているぞあの二人。しかも俺にとつては超不快な発言とみた……。だが、別に悪いヤツらではなさそうだ。当麻もそんな二人を見てやわらかく笑っている。

「おい、恭矢。お前もこつちこいよ。皆で一緒に話そうぜ！」

当麻のその発言に思わず顔の筋肉が緩む。普段友達と呼べる友達はいなかったから、もしかしたらこういった経験は初めてかもしれない。

「おう！」

俺は返事をして、教室に入っていった。

過去に背負った恐怖を忘れて、そのときはただ、楽しく、くだらない会話に身を興じたのだった……

E p i s o d e 0 3 銀 恭 矢 (じぶん) (後書き)

誰とフラグ立てようかな………悩むな

主人公設定（前書き）

フラグは誰に立てようかな！

（まだ悩んでいる）

主人公設定

名前：銀 恭矢（シロガネ キョウヤ）

年齢：15歳

身長：168cm

出身地：神奈川県

家族構成：父 - 母 - 長男 - 次男

所属：第7学区のある学校 1年6組

職業：高校生 バイト：コンビニの店員

住居：第7学区とある高校の学生寮 備考：上条当麻の家の上階に住む

レベル：超能力者（レベル5） 現段階では序列に含まれない

能力：「実現咆哮（シュミレートプレス）」

（人物）

学園都市に住む『元普通』の高校生。平凡な生活を送っていたが、ある事件をきっかけに自分の超能力「実現咆哮（シュミレートプレス）」を覚醒させる。

〈容姿〉

過去に起こった事件が元で燃えるような紅い瞳になった。髪型は黒髪の短髪。少々くせつ毛で、毛先が左右にはねている。体格は中肉中背だが能力によって一時的に強化することも可能。基本的には筋肉質な体系をしていて、俗に言う細マッチョである。服装は基本的に学生服で過ごしており、夏は半袖シャツだけで基本的に過ごしている。靴は健康を意識しているのか、黒のバランスシューズを愛用している。

〈性格〉

基本的には無関心を装うが結構な世話焼き好き。面倒と思ったことは一番楽な方法でさっさと片付ける癖がある。過去に起こった事件を深いトラウマに持っていて、相手が自分より幸運な目に遭っていると殺意の衝動に駆られる。だがその痛みを誰よりも知っている為最後の最後で非情になれないなど優しい一面も併せ持つ。好みのタイプは「騒がず、黙らず、笑顔が素敵な女性（ヒト）」らしい。

〈戦闘〉

「実現咆哮（シュミレートプレス）」を駆使し、相手を弱体化させてから動きを止めて戦闘を行なえなくする。基本的にはトドメを刺さない。基本体力は上条と一緒だが喧嘩慣れはしていないので、能力に依存している部分が多い。直接的に相手を攻撃することも可能（相手の身体を爆発させたりもできる）だが一番最初で行なった上

条との戦闘でそれは不可能だと誤認。以後、直接的な攻撃は行なわなくなっている。

〈能力〉

能力は「実現咆哮（シュミレートプレス）」。
自分の声に出した物体、事象などを言った通りに実現することができる。その原理は「原子配列変換」でその物体に声を当てることでその物体からある物体に原子を変換することができる。また特殊なもの（重力や波動）の能力自体も変更が可能であると言われている。物体は自然物質から思いついたものまで基本的には何でも出現させることができる（相手が御坂美琴だった場合、周囲に電気を自動的に吸収する物質を出現させた）。また、相手の異能の力に対して、物体として存在しているものなら直接打ち消すことができる（発火能力を持った相手が出した炎など）。

〈弱点〉

声に出す前に攻撃をされると何も反応ができない。また、言ってる最中に攻撃をされて言っている内容が中断されるとその現象は発生しない。また、一番最初に上条と戦ったとき、直接的に相手を攻撃をすることは不可能と誤認する。その後は直接的に相手を狙うことは言わなくなる。

主人公設定（後書き）

ちなみに弱点や人物は話が進むにつれて増えていくこともあります。
まれに改変を行なうので、よろしくお願ひします。

皆さん、評価お願ひします！

Episode 4 発端 (じつのはじまり) (前書き)

テストがちかいよ

Episode 4 発端（じつのはじまり）

恭矢が魔術と関わるようになったのは、この日からだった。

「今日は天気もよくて、布団を干すのにピッタリだなあ」

皆さんはこんな言葉を聴いたら、どう思う？

普通なら、『あ、今日は天気が良くて布団を干すのに丁度良い時期なんだ』と考えることだろう。

しかし、銀恭矢はそんなことを言っではいるが、心の内はそんな晴れ晴れとした清々しい考えを持っているわけではない。

「……………はは、笑えねえ……………」

Now、季節は夏。うだるような直射日光、熱されたアスファルト。そしてその暑さを更に増幅させるようなセミたちの高らかな鳴き声。

当然、布団を干すからには天気は晴れ。そう、晴れなのだ。

だけれども、少年は部屋の中。こういう場合はクーラーの効いた涼しい部屋の中を想像してくれたって構わない。というかクーラーが効いていないとおかしい。いやもつと欲を言うならアイス片手にひんやり、みたいな感じがよかった。

しかし、この季節にもかかわらず、三十 も軽く超える真夏のこの日なのに、恭矢の部屋の中はそれ以上の湿度と熱気を持っていた。

(家電製品が………全滅………)

それはなぜかって？ 壊れたからだ。ただ、単純に。しかし家電製品一同がそんなそろいも揃って同時にぶっ壊れるなんて普通はありえない。そう、ありえないのだ。

でもなぜか恭矢の家ではそれが起こった。多分、起こったのは恭矢の部屋だけではないと思うが。

「逆流時の緊急停止装置でも付けとけばよかったな………」

それは昨日のこんな事件が発端だ。

そのときの状況を事細かく説明している。

「当麻。お前何食べる？」

「ん〜。よし、俺は苦瓜ゴーヤと蝸牛エスカルゴの地獄ラザニアにしよう！」

「そのネーミングセンスの欠片もない食い物は何なんだ……」
「？」

七月十九日。本日は待ちに待った夏休み開始の日。明日っから夏休みだーっ！ という上条の誘いを受け、恭矢は家からプラプラ出てきた。

あの時以来、恭矢たちは何があったのかと思うくらい仲良くなっていた。だからこそ今日もこうして誘われ、現在のファミレスにいたるわけだ。

「ん？ おい当麻。あそこにいるのって……」

「は？ ゲッ！ マジかよ……」

我々が見つけたのは少し奥に座っている中学生の女の子。では

なく、その女の子に絡んでいる明らかに不良と呼べる人。
つくづく運のないヤツだな〜と思っていると、こともあろうに上
条当麻君は恭矢ですら気付かないうちにその不良に声をかけてしま
っていた。

正直、もうこれが事の発端と思ってくれても構わない。

直後、声をかけたそのとき、超不幸少年カミジヨーはトイレから
出てきたその不良の仲間に絡まれた。
バカとしか言い様がない。なぜこんなバカに負けたんだろうと未
だに思っている。

「恭矢！ 助けて！ お前の力でコイツらなんとかして！」

バカが話しかけてきた。きっと俺も仲間だと思われたことだろう。

「お前アホか。この状況で俺の力なんか使ってみろ。店吹き飛ばし
たら誰の責任になると思ってるんだ？」

「ああ、そうか……。じゃあ逃げるぞ！」

「そういうことはお前一人でやってくれよ！ 面倒事は」

そこまで言ったとき、視界の隅で電流による火花が散った。

(ヤバイ！ 店が滅茶苦茶になる)

そう思ったときにはもう叫んでいた。

「少女の周りの空気を凝固。決して身動きが取れないセメントのような空間へ！」

恭矢はとりあえず店への被害を懸念して少女の動きを止めることにした。少女は自分の身動きが取れなくなり、電撃を出すようなこととはなかった。

「当麻。やっぱり逃げた方が良いかも」

「だな！ って、え？ いきなりどうしてそんな心変わりを？」

「あそこ見るよ……」

「ん？ ああ、メツチャ不機嫌そうだな……」

少女は時間が経つにつれてその顔にストレスの色が見え始めた。このままにすると、後々面倒なことになる。そう思った。

「じゃあ、お前はとにかく不良から逃げろ。俺はあのビリビリから逃げるから」

「了解！」

恭矢と上条は頷き合つと

「うおおおおお……！」

上条は出口の方へ、

「空間凝固を解除！」

恭矢は少女の封印解く。その瞬間

「ぐるあああああつっ！！！」

不良と少女の、本質的には似たような叫びが店内から上がった。

「おるあ！！ ちくしょうこのクソガキ止まれやこの逃げ足王！！」
「今度こそは本当に消し炭にしてやるんだから！！！」

それぞれがそれぞれの標的^{ターゲット}に食らいつくように走り出す。恭矢はここで困ることなく逃げ出す方法を考えていた。

（えーっと、どうやって逃げようか……。走りだと追いつかれそうだし、よし、空中に逃げよう）

店の外に脱出した恭矢は、

「目測で図った部分の空気を固定！ 硬度は踏みつけられるレベル

に！」

何もないとところに階段があるかのように空中を駆け上がった。

「んなつ！？ またそれで逃げる気！？ 卑怯じゃない！」

「ふざけんな。こつちはさっきまで優雅に食事してたんだ。その和やか奪っておいて何言ってるんだこのビリビリ女！」

「ビリビリって……！！ 私には御坂美琴っていうちゃんとした名前があんのよ！ いい加減覚えなさいよ！」

そういつと少女は頭から発した電撃の槍を俺に向かって投げつけてきた。

「やつべ！」

辛うじて避けることに成功。だが目測を誤った所為で恭矢は空中の固定に失敗した。

「ちつ……重力を調整！ 己の半径五メートル以内の重力を半分に！」

急激に落下速度が低下する。周りを半重力に設定することで地面の激突を避けることができた恭矢はゆっくりと地面に着地した。

だがしかし、その目の前には先ほどの少女がいた。

「もう逃がさないわよ……！！」

「うわー、助けてー、目の前の鬼畜ビリビリ女に殺されそうですー」

「アンタ……私をおちよくってそんなに楽しい……？」

目が据わっていた。怒り心頭だ。このままだと消し炭にされるのも時間の問題だろう。

やれやれ、と呟きながら恭矢はいつも使っている手段で逃走を計った。

「自前方三十センチに

」

「そうはいくかあっ！」

俺が言い切る前に少女は電撃の槍を飛ばしてきた。やばい、と思った所で反応はできるわけがなく、恭矢はその槍に身体を貫かれた。

かに思われた。

少女から繰り出された電撃は、恭矢の後ろから伸ばされた右手によってあえなく打ち消された。

「今度はアンタ……？　また揃いも揃って私に楯突くなんて……！」

「大丈夫か、恭矢！」

「あ、ああ。サンキュー当麻」

上条がわざわざ助けに来てくれたのだ。あの不良を振り切ったのだろうか？　だとしたらそれはそれで凄い。

「当麻。俺が言葉を言い切るまで、俺の盾になってくれ。そうすれば今日この面倒くさい事件は全て終わりで万事大丈夫だ」

「了解！」

上条は俺の目の前に立ち、少女を見据えた。

「さあて、長い行くぞ……原子配列変換最大出力！　空気中の水素を酸素と結合。水に変換……（ブツブツ）」

恭矢は少女を確実に潰す為にわざわざ長い言葉で攻撃文を唱え始めた。

「くっ！　何されるかわからないけど、ここは攻撃あるのみ！」

少女は続けざまに何本もの電撃の槍を放つ。しかしそれはあえなく上条の右腕によってかき消されていった。それが効かないとわかると少女はさらに憤りをあらわにした。

「ちっ！　なら」

次に少女は磁力を操り、周りの砂鉄を集めて刀の形を作り出した。波打つ衝撃のようなその刀は、少女の腕の動きと連動し、上条に振

り下ろされた。

しかし、上条には例外なく異能の力を打ち消す力がある。その刀は上条の右手に触れた瞬間、ただの砂鉄に戻っていった。

「あー、もう！　ほんつとアンタらムカつく！」

「あのさー……………そろそろ俺らに噛み付いてくんのやめない？　流石にもう飽きたでしょ？」

「絶対に嫌！　今日こそ絶対にポッコボコにしてやるんだから！」

「はあ……………って、もう終わりだな。」

「……………を、固定。その水の一部を純水に変換。少女の周りを取り囲むような球体にして配置！！」

丁度そのとき恭矢の言葉が終わる。その瞬間、周囲の空気中から突如水が発生した。その水は流れるような動きで少女の身体を取り囲むと、そのまま自分の体内に取り込むような感じで少女の動きを取れなくした。

「何よこれっ！　きゃっ、冷たっ！　っていうか……………！」

何を言っているか分からなかったがとにかく困ってるように見えただのは確かだ。

純水を使用しているので電気は絶対に通らない。どう足掻いてもこの空間でこの少女は無力に等しかった。

あっという間に少女は水に飲まれていき、最後には動かなくなっ

た。

「水の結合を解除。元の酸素と水素に変換」

少女を取り囲む水が一瞬のうちにして消える。そのまま少女は落ちてゆき、

「おっと」と

上条が見事にキヤッチ。

「……………別にそのままでもよかったんじゃないか?」

相手は本気で恭矢らのことを狩りに来ている野蛮な少女。このまま放置しても何の問題もないと思うのだが上条は、

「そんなこと言つなよ。一応中学生なんだし」

と言い、どこかに休める場所はないか探していると

「ふつ……………油断したわね!」

「!?!?」

ふと声が聞こえ、かと思つた瞬間には上条の身体が数メートル先に吹っ飛ばされた。

「がはあつ!?!?」

「当麻!?!……………一応聞くけど、大丈夫か?」

「……………そこもつと心配してくれてもいいんじゃない?」

上条を吹っ飛ばしたのは気を失わせたと思つていた少女だった。その細く短い脚からは想像もつかない蹴りを放つた少女は、上条の前に立ち、こう言った。

「まんまと引つかかったわね! やーい!」

「……………演技か。全く、面倒くさいことしてくれるじゃない」

か

相手は電撃使い。電気を利用した加速で強力な蹴りを生み出したって所か。もうやられてくれたと思っていた恭矢らは本当に面倒くさい顔をした。

蹴られた当麻も立ち上がって、

「……………本当についてねーよ」

世界の全てを嘆くかのように言った。仕方がない、今日は何とん付き合ってやるか。

恭矢と上条は横並びになり、互いにこう言い合った。

「オマエ、本当についてねーよ」「よ」

これが、昨日の七月十九日の締めくくった、最後の一言である。

「というわけなのでした、と自分自身に言ってみる俺でした」

くだらない回想をしてるな、と心の中で思いつつ、恭矢は台所に立つ。昨日の少女との戦闘は壮絶の極みだった。少女の気が晴れるまで（というか飽きるまで）夜通しずっと叫んでいた所為で喉が痛い。

昨日は前途多彩な攻撃をしていたみたいだが、恭矢と上条にかかればそんなもの無いに等しかった。

だが、最後にやられたのは本物の雷。これがマジでまずかった。落とされた雷は恭矢の声で作った避雷針に直撃して難を逃れたかに

思えた。しかし、思いのほか圧が高く避雷針でも受け切れなくなった電流は全て他の場所に流れ出した。この所為で、あたり一体の家庭の電化製品はショートして全滅。俺たちも例外じゃない。

冷蔵庫も壊れていると思うので、中に残っているのは調味料と生ゴミの塊だ。片付けが大変だろうなと上下階の住人は思っていることだろう。

「てか、当麻アイツも大丈夫かな………?」

恭矢は能力者なので研究費として毎月かなりの大金が送られてくる。これは自分自身なにもしないでも金が入ってくるぜヒヤッホー！ という状況だが上条はそうはいかない。

アイツは見た目も中身も無能力者レベル。もちろん月に貰える金も少ない。よってこの壊滅的状况を打破できるなにかは上条にとって皆無に等しいのだ。

「仕方ねえな。後でコンビニ行って何か買ってきてやるか………」

とりあえず布団を干そう、そう思ってベランダに出た。下の階では今頃上条が、「不幸だ〜!」とか叫んでそうだなーと考え少し笑う恭矢。

布団を干しながら何気なく下の階のベランダを見た。すると、そこには既に白いシーツのようなものが干されていた。

「あれ、当麻アイツも布団干してたのか?」

ふと疑問に思う。確かに絶好の洗濯日和なので、布団を干すという考えには賛成だ。だけど、もう上条が起きているとは考えにくい。始まったばかりの夏休み初日にわざわざ早起きなどするだろうか?

その疑問を深く考え、もう一度じっくりとそのシートを見つめる。
すると

「……………動いた？」

少しだがシートが自分で動いたように見えた。

「……………いやいや、気のせいだって。そんなバ
カなことがあるわけ無いでしょうが。それに、ほら風だよきつと！」

動揺を隠せずにいる恭矢にさらに追い討ちがきた。

風によって舞ったシートの上のほうから銀色の髪の毛がブワァー
と舞い上がった。

「……………いや、アレは糸だ。断じて髪の毛じゃ
ない、うん」

それでも現実から目を逸らそうとする恭矢にトドメが入る。

『おなかへった』

「……………」

明らかに上条の声ではない。よく聞けば女の子の声をしている。

（まさかこのシートは女の子に変形するロボットでしたとかそういうオチじゃないよな？）

一番最悪（自分の中では）な光景ヒジメが浮かんでしまった恭矢はその妄想を振り払った。そしてどうしたらいいのかを考えた。

「……………よし。下の階にお邪魔しよう」

言うが早いか恭矢はベランダの手すりに足をかけ、空気を踏みしめられるように空気中の酸素を固めた。

そして螺旋階段のように下の階に降りる（もちろん空中）と、そこには

「ぎゃあああああああああ……!!」

焼きそばパンを腕ごと銀髪少女に与えて餌付けをしている奇妙な

友人の姿がそこにはあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9825x/>

とある進化の実現咆哮（シュミレートプレス）

2011年11月16日22時24分発行